

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4091700064		
法人名	有限会社森の母屋		
事業所名	グループホームはなれ		
所在地	福岡県直方市上境2614-3		
自己評価作成日	平成30年11月5日	評価結果確定日	平成30年11月26日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	平成30年11月13日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

同一敷地内には、開設11年目の訪問看護ステーションがあります。日中はステーションの看護師が様子観察に來所します。また利用者が容体急変時は看護師がすぐに対応でき、連携している医師とも連絡をとり指示を仰ぎ、適切な処置を施す事が出来ます。施設の窓からは、福智山系が一望でき季節の移り変わりを目と肌で感じられます。施設の庭には畑を作っており季節ごとの野菜の収穫を見ることが出来、収穫した野菜は日々の食卓に並びます。今年の夏はスイカを7月から9月までおやつと水分補給を兼ねよくた食べました。なすびは10月中旬ごろまで収穫がありました。また天気の良い日は、利用者と一緒に施設の庭を散歩し、気分転換を図るようにしています。隣に小規模多機能施設が有り、共有広場にて火・木・土曜日は午前中体操やゲームをして他利用者、介護従事者と交流を図っています。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

「お母さんに会いたい」、「家に帰りたい」と繰り返し話され外出傾向のある入居者の思いをそのまま受け入れ、職員は理念に掲げた入居者のその人らしい生活を支援している。大腿骨骨折された入居者を元の状態に戻したいと、隣接する訪問看護ステーションと連携した立位や歩行などのリハビリで、歩行器で歩行できるまでになっている。また、「うちは出ていかん」と宣言され、孫やひ孫の来訪のある中で逝去された100歳の入居者の「皆に迷惑かけるね」との声かけで、対応に苦慮したことが一瞬で消え、淋しくなりましたと職員は話している。昨今、職員の退職が相次いでいるが、職員の研修機会を確保し、パート職員以外は正職員として雇用し、残業ゼロを目指すなど、働きやすい職場づくりに努めている。自治会加入や恒例の地域行事への参加を継続し、定期的に開催されている運営推進会議で入居者の暮らしぶりを報告している。今後も市担当者と連携しながら、系列事業所と一体となった理念の具現化で地域包括ケアの促進が期待できる。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/  
事業所名 **グループホームはなれ**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は玄関の壁、スタッフルームに掲示している。朝礼時、理念を唱和し、利用者個々の生活環境を尊重し、日々の実践に取り組んでいる。	理念の唱和を継続し、日々実践に取り組んでいる。「お母さんに会いたい」、「家に帰りたい」と繰り返し話される入居者の思いをそのまま受け入れ、職員は個々の入居者のその人らしい生活を支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会隣組入会し、隣組の行事、市の行事には積極的に参加している。地域の恒例行事の丑相撲(子供の)に行くと、いつも来賓席にて見学できるようにしている。	自治会加入を継続し、今回は実施されなかったが、地域防災訓練の参加を予定するなど、地域交流に努めている。今年も神社の境内で開催された子ども相撲や市主催の地域小学校の行事案内を受け、入居者と参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の区長、民生委員、老人会の会長等に認知症ケア、介護保険に関する情報提供を行い、地域の人たちに向けて活かしている。昨年冬の地域の老人会に参加し、お祭りマンボを踊り、参加者といっしょに体操を行う。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、地域の方、利用者の家族に参加してもらい、当事業所の実態を報告し、出席者より意見や要望を出していただいている。運営推進会議の議事録はスタッフルームにて誰でも閲覧できる。	適切なメンバーで定期的開催され、会議録を整備している。会議では、行事や受診状況、看取りについて報告している。今後は身体拘束適正化に関する情報を提供し、意見を伺っていく予定である。	会議抄録を玄関入口のボードに掲示し、運営推進会議の設置目的の周知や更なる会議の活用を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市とは、報告、連絡、相談等を電話や面談で行っている。	運営推進会議でホーム状況は詳細に報告しているが、系列事業所の介護支援専門員の活用や運営に関することを、日頃から相談し情報の提供を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が身体拘束を理解し、日中は玄関の施錠はせず、職員見守りで自由に屋外へ出ていけるようにしている。	身体拘束に関する研修を開催し、適正化に取り組んでいる。外出傾向のある入居者には納得されるまで散歩に付き合ったり、途中で歩けなくなり職員のおんぶで帰園されたこともある。食事用のエプロンは、家族や入居者の意向を伺いながら使用する予定である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員全員が外部の研修は受けている。、事業所内では職員全員で虐待につながる行為がないか、確認を行い虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は外部研修で成年後見制度・権利擁護については学んでいる。職員には、会議にて研修している。利用者開始時には契約書等にて説明している。現在のところ成年後見制度の利用者はいない。	契約時等に、日常生活自立支援事業や成年後見制度を説明するために、パンフレットを整備している。現在まで、制度等の活用はない。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、重要事項説明書について十分説明している。後日疑問に思われたことなどは、いつでも尋ねていただくよう伝えている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約書の中に苦情に対するの受付を表示している。利用者からの事業所での苦情や、家族からの苦情に対しては迅速に対応し解決を図っている。家族の面会時に、出来るだけ声掛けを行い、話しやすい雰囲気作りをしている。	恒例の秋刀魚焼きは急遽の開催で3家族が参加され、2日に1回来所される家族もあり、来訪時や行事参加時に入居者の状況を報告している。おむつは家族が購入される入居者もあり、系列事業所に対する家族のご意見もホームで話し合い、運営に活かしている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティング、定例会議等で職員の意見を聞く場を設けている。	朝食づくりのため、早朝6時出勤の運営者に夜勤で困り事があれば即相談するなど、日頃から率直な意見交換が行われている。管理者は掃除機を毎年購入してもらっていると話すなど、全職員で入居者に心地よい生活環境の整備に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	昨年度より給与等に反映される査定や人事考課を整備している。介護福祉士等の資格を取得するための、研修勉強会等には優先的に公休、有休を与えている。今年4月、社員は基本給を、パートは時給を各々に対してアップしている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の募集・採用にあたっては、性別や年齢等を理由にして採用はきめていない。	ハローワークなどで職員を募集している。開設時からの職員もいるが、職員の声かけで入職する職員も多く、40歳～60歳代の女性の職員が就労している。今年度は職員の退職が相次ぎ、応募していた技術向上研修参加ができなかったため、敷地内の訪問看護ステーション所長が移乗などのスキルや様々な症状に関する対応を講義している。パート職員以外は正職員として雇用し、年始の勤務者にはお年玉をと運営者は話している。残業ゼロを目指すなど、働きやすい職場づくりに努めている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員等に対する人権教育・啓発活動には研修を通じて取り組んでいる。	接遇に関する課題は会議で随時話し合い、身体拘束に関する研修会を開催している。大声を出すことや「ちょっと待って」などの言葉遣いに配慮したケアが実践されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は福岡県主催の介護職員技術向上研修に予約はしていたが、退職者が多数あり研修をキャンセルする。訪問看護の所長が、施設内でその都度又は会議にて研修を行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	同業者とのネットワーク作りや、勉強会は現在行っていない。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用相談を受け、初回来所時には利用者を尊重し、本人の困っていること、不安な事や要望などを、表情や行動を観察しながら、傾聴できる場の雰囲気、関係づくりに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が電話や来所された時には、困っている事、不安な事、求めている事をよく傾聴して施設の目的や機能、実施している事などの説明を行い家族の要望等を伺いながら、関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の思いや要望を把握して、施設の介護の特性や他施設の特性などの状況提供を行い、必要なサービス提供を支援している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の思いに寄り合いながら、日々の暮らしの中では、天気の良い日には一緒に散歩に出かけ。洗濯ものは一緒にたたみ、ゲーム・体操等は職員と一緒にを行い、作品作り塗り絵等出来た時は達成感を皆で共有し互いに支え合う関係を築いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設での生活の中で出た不安や要望を家族に伝え、家族に協力して頂くことで共に利用者を支える関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から、馴染みのある方(教え子さんや趣味と一緒に習い事をされていた方)が来所された際は、ゆっくりと会話等が出来る場所の提供を行い、本人との関係が途切れないように支援している。	2日に1回家族が来所されたり、教え子から事務所に「会いに行ってもいいか」との問い合わせの電話があった入居者もある。入居者と一緒に活動されていた踊りの会の方の来所もあり、踊りの会の方々には、クリスマス会で踊りを披露していただく予定である。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性等を見きわめ、座る場所など考慮したり、レクレーションでは皆が楽しく参加できるような声掛けを行っている。又利用者が独りになることを防ぎ利用者同士の関係の強化に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年1月末に看取りにて亡くなられた家族とは、今でも交流があります。利用者本人の初盆には、グループホーム管理者、訪問看護所長にてお参りする。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者とのコミュニケーションを図り、本人の思いを傾聴することで、ニーズの把握に努めている。	アセスメントシートや認定調査項目を整備し、職員を担当制にして、入居者の意向の把握に努めている。夕方になると、「家に帰る」と荷物をまとめられる入居者の思いをそのまま受け入れ、理念に掲げたその人らしい生活支援に努めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメント表を見たり、日常生活の中で若いときの話を聞いたりし、利用者の背景の把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎朝バイタル測定を行い、調子の悪い利用者においては、訪問看護のナースと相談し、できることを見極めるように努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態維持のために必要なケアを、訪問看護や家族、職員と話し合い、現状に即した介護計画を作成している。	担当者会議で、入居者や職員の意向、職員の気づきを話し合い、計画の作成や見直しをしている。大腿骨骨折で入院していた入居者を元の状態に戻したいと、隣接する訪問看護ステーションと連携した立位や歩行の訓練で、歩行器で歩行できるまでになった入居者もある。	日頃から入居者の言動を十分に把握されているので、入居者や家族の意向に沿った介護計画作成や見直しを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に1日の様子を記入し、朝・夕に申し送りを行うことで、利用者の変化に対応を職員間で共有しながら実践に生かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が来所され、利用者本人を連れて外出に行かれたり、家族が利用者を美容室に連れて行かれている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の人が毎週ボランティアで読み聞かせを、また地元で活躍されている園芸団が歌や踊りを年数回来所され披露している。いつも最後は炭坑節を利用者と踊っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	2週に1回、利用者本人の症状に合ったかかりつけ医(神経内科または呼吸器系内科)の往診時に、日々の変化を伝えることで、適切な医療を受けられるように支援している。	多様な協力医療機関と連携体制を整えている。3ヶ所の医療機関から訪問診療を受け、隣接する訪問看護ステーションの方針で、3ヶ月毎に健康診査を受けている。歯科や眼科受診は職員が同行することもあり、適切な医療を受けられるように支援している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタル測定や利用者本人の様子がいつもと違う時には、訪問看護のナースに報告し、対応して頂く。(訪問看護ステーションは同一敷地内で誰かが常駐)		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の先生やソーシャルワーカーとの連携を密にとり、入退院の打ち合わせや状態の把握に努めている。早期に退院しても病院の先生の特別指示書等により訪問看護が対応している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化した場合・看取りに関する指針」を作成する。利用者家族、介護職員、管理者、かかりつけ医、訪問看護の連携にて取り組む。	主治医や隣接する訪問看護ステーションと連携し、看取りを支援している。「うちは出ていかん」と宣言され、孫やひ孫の来訪のある中で逝去された100歳の入居者もある。「皆に迷惑かけるね」との声かけで、全職員が振り回されたこれまでのことが一瞬で消え、淋しくなりましたと訪問看護ステーションの所長や管理者は話している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急事態発生時のマニュアルはあるが、実施訓練を定期的には行っていない。しかし、実践にてその都度訪問看護と適切に対応している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域(上境)の消防団とは協力体制を築いている。今年6月17日に小規模多機能と合同で避難訓練を行っている。今回は自動通報で消防署と連携を取っている。	年2回避難訓練を計画し、次回は12月に夜間想定訓練を実施予定である。日頃から、民生委員に協力をお願いするなど協力体制づくりをしたり、飲料水やお米、缶詰等の食品やおむつなどを備蓄している。ホームは高台のため今夏の大雨の被害はなかったが、自宅が被災した職員もあり、災害時の職員体制や職務規定が課題となっている。	今夏の大雨の経験から、今後はさらなる自然災害への備えが求められることから、備蓄台帳の整備を期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の方々には人生の先輩であるという尊厳の念を持って接している。個人情報やプライバシーの確保は職員間で情報交換を行いプライバシーに配慮した対応に心がけ、実施している。個人記録に関しては施錠できる場所に保管している。	各入居者の生活歴や職歴などを十分に理解した対応が実施されている。やさしく名前を呼ばれ、笑顔になる入居者が多く、日頃の対応が伺えた。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り利用者本人から希望を聞き、本人の意思決定によりサービスを実施している。また理解力に合わせての説明を行い支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切に、利用者の希望に沿って好きなように過ごして頂いている。レクリエーションへの参加等は無理することなく本人の希望に配慮して、柔軟な支援を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から着ていた服や、使用していた化粧品・装飾品等は自宅から持参して頂き、利用者本人の好きな身だしなみやおしゃれができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在、食事作りは集中厨房で行っているの、食事作りに参加していない。あとかたづけやテーブル拭きなどはしてもらっている。施設の畑で収穫した野菜は利用者に見せて、これが今日の食事のおかずになりますと言って	ホームの菜園でとれた食材で「家庭の味」を看板にしている。今年も庭で恒例の秋刀魚焼きを楽しんでいる。胃ろうの入居者以外は、全員が箸で自分のペースで食事をしている。毎月1日と15日は伝統食の赤飯(小豆ご飯)を継続し、誕生日に好評のちらし寿司が定番となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分確保は個人記録にその都度、量を記録し、1400cc摂取を目安とし、利用者により調整している。食事量は利用者に合わせて加減している。特に疾患のある利用者には状態に合わせて工夫している。ティタイムは紅茶・コーヒー・日本茶・牛乳等日々アイテムを替えている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアは行ってもらい、うがいもしてもらい、入れ歯をきれいに洗えるように声かけを行ったりしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人一人の排泄パターンを把握し、出来る限りトイレでの排泄をめざし、声掛けや誘導をして排泄の自立に向けた支援を行っている。	夜間はおむつ使用者が3名いるが、日中は全員トイレでの排泄を支援している。トイレに歩行器で移動する入居者もあり、訪問看護ステーションとの連携で自力での歩行を支援している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳飲んで頂いたり、刻み食にしたりなど、個々に応じた予防を行っている。便秘の兆候があるときは、訪問看護と相談し、指示を受けている。またスタッフみんなが水分摂取や運動への働きかけを行っている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	開設当初は、一人ひとりに合わせて入浴を行っていたが、現在は曜日・時間を決めて行っている。月・水・金が入浴日。7月・8月は日曜日以外毎日シャワー浴。	週3回入浴を支援し、他の4日は足浴を行っている。浴室に設置されたリフトを使用する入居も多く、入居者の安心や安全を確保し、職員の介護負担が軽減している。入浴を億劫がる入居者には、時間を置いて声をかけるなどの工夫をしているが、浴槽につかると「もう少し(はいていたい)」と話す方もある。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後のひと時などソファで休息、昼寝などしている。居室での休息を希望すれば、居室へ誘導している。夜、就寝する時はいつも着ているパジャマに着替えて、自宅と同じようにリラックスしていただけるようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の目的や用法、用量について理解し、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。各利用者の薬の仕分けは訪問看護のナースが毎日行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌を歌ったり。洗濯ものをたたんで頂くなど生活歴に応じた役割や気分転換を図っている。気候の良いときは、デッキにてお茶やおやつをしたりしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	1年を通して、天気の良い日は、出来るだけ施設の外へ出て、周囲の山や花や自然と触れ合っている。春は花見、夏はそうめん流し、秋は外で旬の秋刀魚バーベキュー、地元のコスモス畑の見学などで外出している。	外泊はないが、家族と外出する入居者もある。車3台でコスモスを見に出かけたり、敷地内を散歩したり、隣接する小規模多機能事業所との間に設けられたウッドデッキには椅子とテーブルが設置され、季節折々の外気を楽しむ場となっている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者本人は全員お金を所持していません。外に出かけアイスクリーム等を食べる時も職員がお金を管理している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者本人が電話をしたいという申し出は今のところない。家族に電話して会いに来るように言っているとされた時は、すぐに連絡を取っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節感のある花などを置き、居間のカウンターには季節ごとの置物を飾り、季節感を取り入れている。室温は温度計と利用者の要望で調整し、加湿空気清浄機を使って室内を居心地良く過ごせるように工夫している。室内は利用者の青春時代の歌や童謡、クラシックを流している。	門扉傍の家庭菜園では季節の野菜が栽培され、ウッドデッキの玄関に立つと階下の厨房から、今日の昼食はと想像するほど美味しい匂が漂ってくる。玄関の右奥にある共用空間は空調が管理され、明るく清掃が行き届いている。厨房中心に円形のテーブルや椅子が設置され、入居者は大型テレビ前のお洒落なひざ掛けやクッションが置かれた黄色い椅子で寛いでいる。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人掛けのいすを対面式にならべ、全員が一緒に座られる。一人でいたいときは、黄色のソファに座られている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が以前使っていたタンスや小物・飾り物を居室に置き、少しでも居心地良く過ごせるようにしている。	居室ドアにはかわいい表札が飾られ、暖簾が掛けられた居室もある。家族が用意したテーブルや筆筒が置かれ家族写真が飾られたり、亡くなった夫との写真や100歳のお祝いの賞状が飾られたり、其々が居心地の良いその人なりの居室づくりを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	床はバリアフリーで廊下、トイレ、浴室などは手すりを付け、安全に歩行、移動が出来、自立支援に努めている。利用者用のトイレはフロア、廊下に4つ配備し、本人が使いやすいトイレを利用している。		